

華燭

舟橋聖一



華 燭

舟橋聖一



中央公論社

華燭

◎一九六六

定価四八〇円

昭和四十一年十一月十五日 印刷
昭和四十一年十一月二十一日 発行

著 者 舟橋聖一

発行者 宮本信太郎

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六二)五九二一
振替東京三四

小說集
華
燭
目
次

剥製の猫

五

紅葉のつり橋

四

華燭

三

槿の葉

二

淵川

一

年 齡

二五

恋の山

二九

紅の山

三三

風中燭

三七

装 幀

福田豊四郎

剥製の猫

○

最初から、あなたには嘘があった。

私はあなたのような人が、誰のものでもない筈がないと、思いながら、あなたが独り者のように振舞うので、その通りに信じこまされてしまった。

その点では、たしかに私のほうが、大分おめでたいと云える。

あの日は氷のような雨が降っていた。実に寒い日だった。私の貧しいアパートには、ガス・ストーヴがない。それで、炬燵にタドンをいけて、背中を丸くしていた。私は何か読んでいた。何を讀んでいたか忘れてしまったが、目は活字を追いつつながら、心はあらぬことを思いつづけると云った風で、目と心のチグハグな、うつろな読書だった。アパートと云っても、日本建築だから、隙間風がいくらでもはいつてくる。それが、私の氣持を、おちつかせないせいもあった。

私が何を思いつづけていたかと云うと、それは、あなたのことだった。あなたが、私を好きだと云ったことだった。

「好きです。好きなんて云うより、大好きなんです」

と、あなたは云った。二度も云った。然し、そう云ったあとで、

「でも、それ以上、どうしようなんて考えたことはないの……あたしって、いやな奴でしょう」

と、あなたは云い直した。

私は黙っていたが、その通りだと思った。好きだからと云って、一々深入りをしていたら、大変なことになるから、なるべく危険区域には近寄らぬほうが、利口にちがいない。

——そのアパートには、住んでいないが、そこから三丁ほど離れた表通りの小さい喫茶店は、妻の澤子みよこが経営していた。入口の前に、洋菓子部があって、洋菓子だけ買って帰る客もあった。

その店は、私が澤子と結婚する前からあった店で、もともとは、澤子の母が、後援者に買ってもらったものを、幾度となく改装したものであった。店の名前は、「すい星」というありふれた名だが、何しろ母の時代からやっているで、その近所では、有名だった。ずい分、遠くから買いにくる人もあった。それがまた、澤子のせめての自慢だった。

知ってか、知らずか、あなたは、私の店の包紙に包んだシュークリームシュークリームのボール箱をもって、私をアパートにたずねた。それで二人は大笑いをしたが、あなたは、それを聞いた途端に、食慾がなくなつたと云った。

一番最初に、あなたに逢つたのは、ある劇場の地下の奈落だった。花道の丁度真下にあたる簀の子のへんで、そこからは楽屋口へと通じていた。友達の小説が舞踊化されるので、家元の夏村参之丞に紹介されて戻つてくると、あなたが反対側から歩いてきて、

「あの……夏村さんの部屋はどちらでしょうか」
と、私に訊いた。

「夏村さんは、あすこだが——」

私は振返るようにして、楽屋暖簾の垂れている部屋の入口をさし示した。

「ありがとう。ついでに、夏村さんに紹介してくれませんか」

と、あなたは押の強いところを見せた。

「実は私も紹介されたばかりなんだ」

「でも——」

「どういう用件？」

「グラビアの写真なんです」

あなたは名刺を出した。或る雑誌社の名が刷ってあった。婦人記者ということが、すぐわかった。

「それじゃア」

と、私は引うけて、再び参之丞の部屋へとつて返すと、次の間に控えている内弟子のお梅さんに取次いで貰った。あなたの背ろには、なるほど、背の高いカメラマンがいて、参之丞が承知すると、あなたより先きに、奥へはいっていった。

私は、あなたを紹介したら、すぐ帰ってしまえばよかったのに、もの好きにも、お梅さんのすすめるまま、またノコノコ、参之丞の楽屋へはいって、

「どうも、さき程は——今、こちらに逢ったものだから」

と、ボソボソ、云いわけをしながら、鏡台で、肌ぬぎになっている女のような参之丞の化粧すがたを、カメラが追って、

パチ パチ

パチ パチ

うつして廻るのを、私も一緒になって見物するうち、あなたが如才なく、

「御一緒のところを一枚いかがですか」

とすすめるし、参之丞までが、

「サア、サア」

というので、私は、友人の富中をさしおいて、参之丞と二人きりの写真を一枚、とって貰ってしまった。

私はもともと、二つの私立大学を、かけ持ちで、教えている野暮な国語の教師であるから、こういう舞台裏風景なり楽屋情緒なりには、異国情調エキゾチックに近いほどの憧れと羨望がある。ことに参之丞のまっ白な背中を見ていると、心がしびれてくるような気がした。彼の肌は、雪をあざむくようだが、胸毛や腋の下には、黒い毛がもっさりあった。また乳首のまわりにも、長い奴がのびていた。男同志だから、何ンともない筈だが、私は照れくさくて、まともには見られなかった。それなのに、あなたは平気で、参之丞のそばへ行き、

「ちょっと、こう首を曲げて、この牡丹刷毛を持って頂戴」

だの、

「眉を劃いていらッしゃるところを、お願いしまアす」

だのと、いけ酒蛙々と指図するので、私はほんとに、吃驚びっくらしてしまったのだ。そこへ富中が

はいつてきて、

「何んだ。また来ているのか。僕は客席かと思つて……探していた」

と、少し非難めいて云つた。富中はあなたを知っている風で、

「この間はどうも——」

と、挨拶をしていた。富中と参之丞が並んでうつすことになったが、あなたもこんどは私をさそおうとはしなかった。その代り、私のそばへ来て、

「今日は、ありがとうございます。おかげさまで——」

と、小さい声で云つた。そういうことが、すべて忘れられない。普通なら忘れてしまふことが、忘れられない。

そのついでに……つまり、あなたを媒体として、参之丞の鏡台がりっぱだったこと。刷毛が何種類もあり、それが秩序よく、鏡台の抽斗の中におさまっている光景。それから、着付になって、参之丞が、パツと立上ると、衣裳方が前にまわつて、白い積鼻禪ふんどし一本の彼の下半身へ、まっ赤な緋縮緬の蹴出しをまいた一瞬のあでやかさ。衣裳がすむと、鬘も。それで完全に女に化身する。みな忘れない。

まったく、私は目を奪われた。吐息といきが洩れそうになった。

あなたは、そこで又、一枚、カメラマンに命じて、写真をとつた。実に事務的な冷静さだった。富中が、しきりに何か、舞台上の注意のようなことを喋べっていたが、私は耳にはいらなかった。

あるとき、参之丞との写真を撮らなかつたら、或いはあなたとこういうことにはならないですんだかもしれない。とすればあの撮影の一瞬が、決定的な瞬間となったわけだ。

あなたは数日後、その写真を私のアパートへ届けてくれた。そのときは、たった二、三分の対話で、あなたは外へも廻らなければならぬと云って、すぐ帰って行った。恐らく、富中のところへ行つたのだらうと、私は想像した。私のところへ、その写真を届けるほどなら、富中も参之丞と一緒に写しているのだから、彼のところへ廻つたとしても、一向ふしぎはない。

にもかかわらず、私は嫉妬にかり立てられ、あなたが帰つたあとで、あなたが坐りもしなかつた畳のへんへ、ホッチキスを投げつけた。そして私は、そういう自分を、ふしぎそうに見た。

次の日、あなたはまたやってきて、こんどは座布団の上に坐つて、一時間以上も話していった。あなたはひとりで喋べた。しかも、主として、あなたのジャアナリストとしての勤勉さについて。ほかの話題は、殆んどなかった……。あつたとすれば、参之丞が内弟子のお梅ちゃんを愛しているというような楽屋囁であつた。

それからあなたは、三日にあげず、私のアパートへやってくるようになった。あなたに云わせると、私にも、富中のように、何か書ける素質があるから、スカウトにやってくるのだ、と、自分を説明した。これからのマスコミは、文壇で認める作家だけでは足りないから、各社とも、これはという新人を探し出すのだと云つた。しかし、それはあなたの見こみ違いに終つた……。

あなたは今になって、最初私が積極的に、そしてやや乱暴にあなたを抱いたと云うけれど、あなたのほうでも、あの手この手を使って、私を促したことは事実だ。あなたは、炬燵の中で、一時間近くも、あなたの身の上話をした。あなたのお母さんは養母であって、ほんとのお母さんは新潟にいる。それもごく貧乏で、芸者屋だか、待合だかの飯焚きをしている。そのお母さんが、今のお母さんに、時々、無心を云ってよこす。今のお母さんが、それを苦に病んで、あなたに、つらく当る。

そんな話をきかされれば、私はどうしたって、あなたに同情するではないか。あなたが可哀そうでたまらなくなる。あなたを救い出したい欲望がまき起る。そういう恥の部分まで打明けてくれるのは、私への愛のせいだとも思わざるを得ない。

あなたが、それを語るときの表情は、世にもいじらしくて、思い詰めている。

「こんな話は、今まで、誰れにもしたことがないのよ」

などとも、あなたは云った。どうして私にだけ、そんな打あけ話をしてくれるのだらうと、私がつい甘く考えるのは、仕方がないではないか。

あなたは、よくマニキュアをしていた。ピンクの日もあれば、臙脂に近い色の日もあった。指輪も時々変っていた。あなたはすぐ、

「ニセモンよ」

と云ったが、オパールやスターサファイヤーは、贋物だって安くはない。キモノに帯で、腕輪をしていることもあった。そうかと思うと、黒ずくめのアンサンブルに、光る真珠のネックレス

スをかけてくることもあった。ニセモンでも、あなたが掛けると、ニセモンに見えない利得^{もうけ}があった。

「誰に買ってもらうの？」

と訊くと、

「自分で買うのよ。誰も買ってくれる人なんて、ありやアしないじゃない」

とあなたは澄して答えたが。

あなたと私との抑制の二カ月あまり。あなたがはじめて来た頃、アパートの庭には、柿の実が色づきそめていた。それが段々に熟してき、枝もたわむほど、鈴成りにぶらさがったのを、あなたはアパートの小母さんにたのまれたからと云って、その梢を竹竿の先きへはさみつけては、

「そら一ツ」

「そら二ツ」

と、上手に枝ごともぎとった。が、竿がとどこぬところは、途中の木の股まで、あなたは木登りをして、そこから竿をのばして、実を搦め取るようなお転婆ぶりを発揮した。あやまって、地べたへ落とすようなことは、一度もなかった。竿で撥ねるようにして落とすのは、みな、あなたの手のひらへおさまった。なかなか、芸がこまい。まるで、上手な皿廻しでも見るようなつもりで、私はアパートの窓辺に立って、それを見ていた。

「いやだわ。そんなところで見てられると、慄えちゃうわ——」

とも、あなたは云ったが、慄えてなんかいなかった。焦茶のウールのスカートがひるがえり、